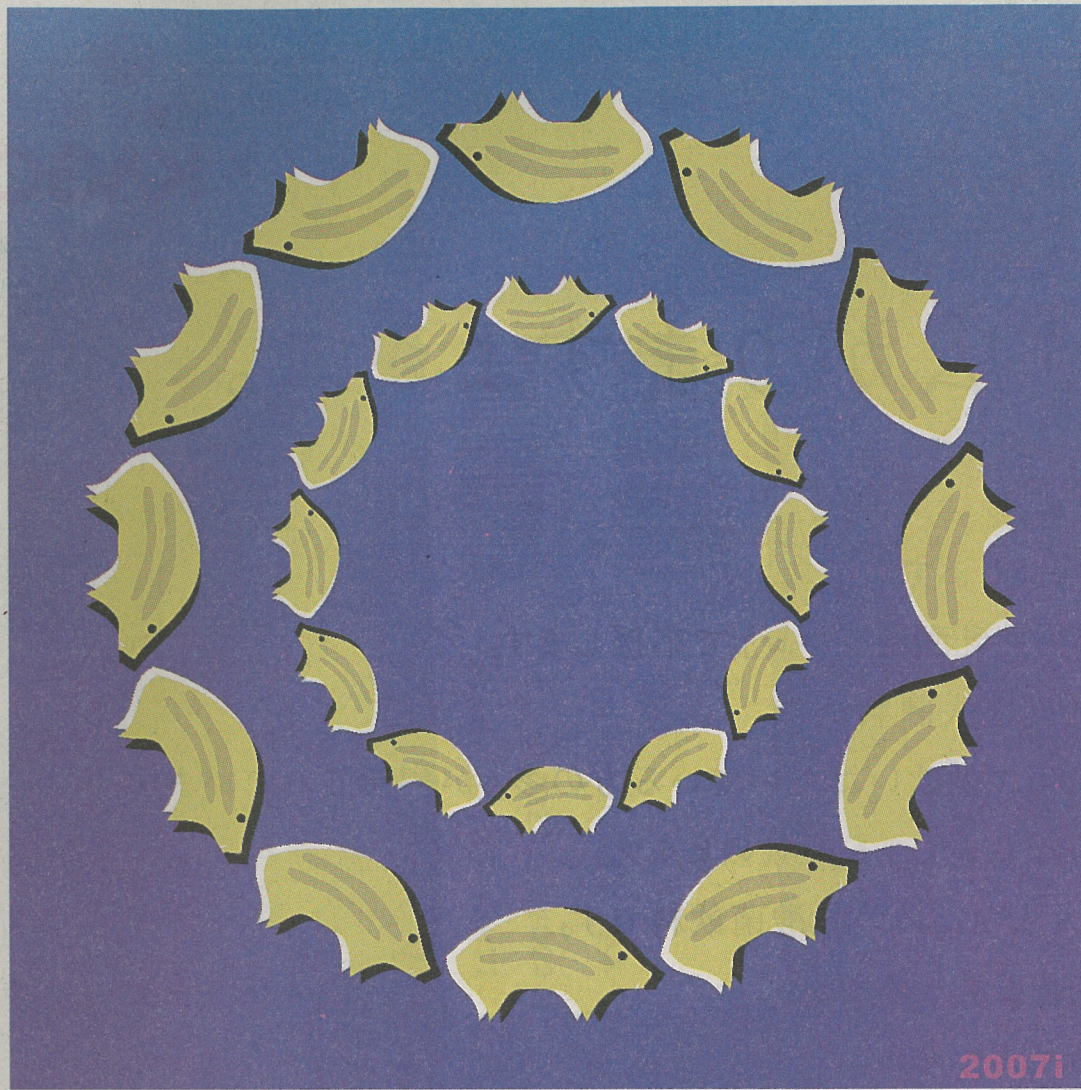
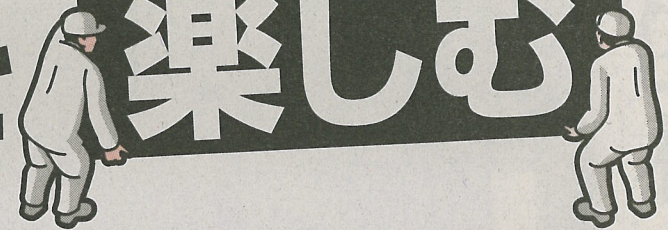
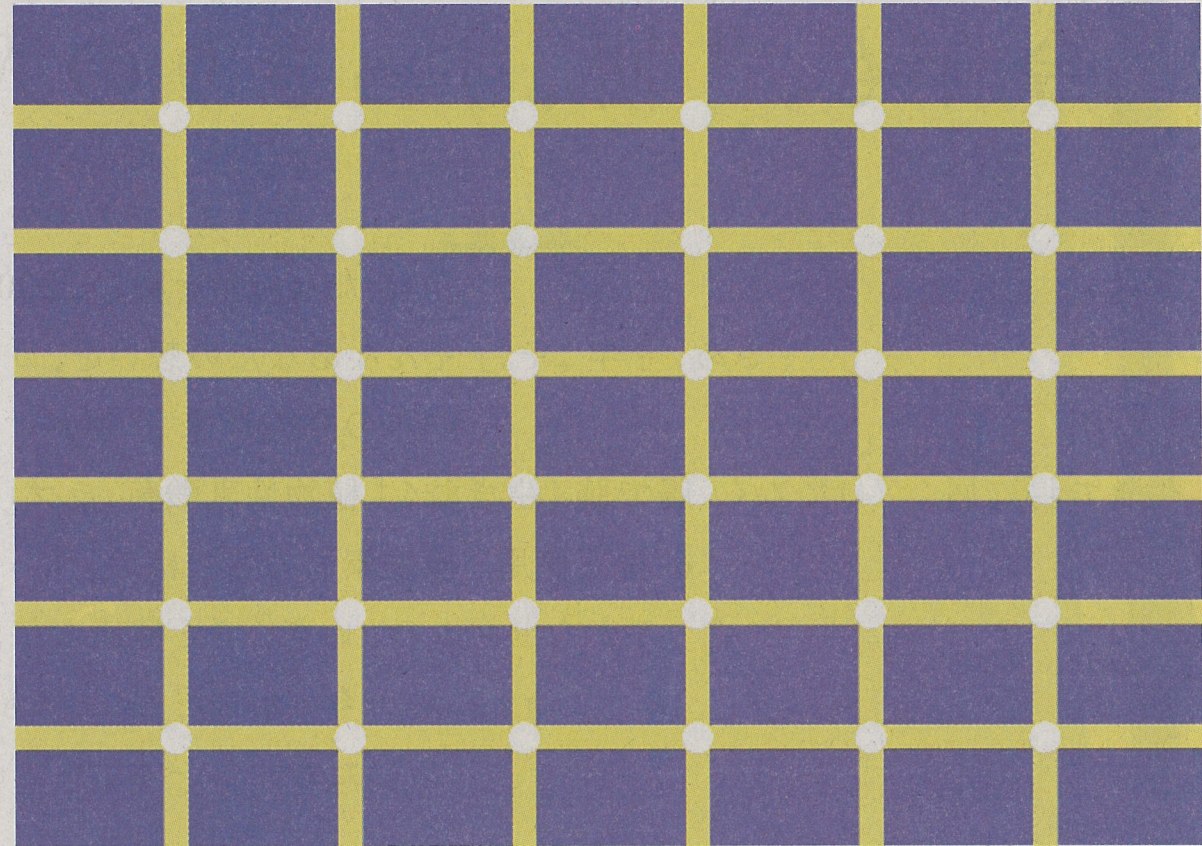


# 脳を楽しむ



(図はいずれも北岡明佳教授作)

3「2007年亥」 イノシシが行進するよ



1「スウェーデンの光」

あれ、白い丸がチカチカ



2「赤の渦巻き」

オレンジ部分と赤紫の部分があるように見えるけれど……

どうして起こる？錯視の

「人間はものを目で見るのではなく脳で見るのだ」という考え方が、今世紀に入り、広く受け入れられ始めた。目の錯覚(錯視)も、目ではなく脳で起る現象であると考えられるようになってきた。錯視は異常ではないので、錯視を研究すれば脳のことをよくわかるかもしれない。

図1「スウェーデンの光」は、白い丸の中に青い光がせわしなく発光して

北岡 明佳

立命館大教授(知覚心理学)

## 好き嫌いの情で動く脳

イラストレーター 南 伸坊

私は本を読まない方の人間だが、若いころから「脳の本」は好きで、割合に読んだ。脳のことを脳で考えるのがおもしろいからだと思う。

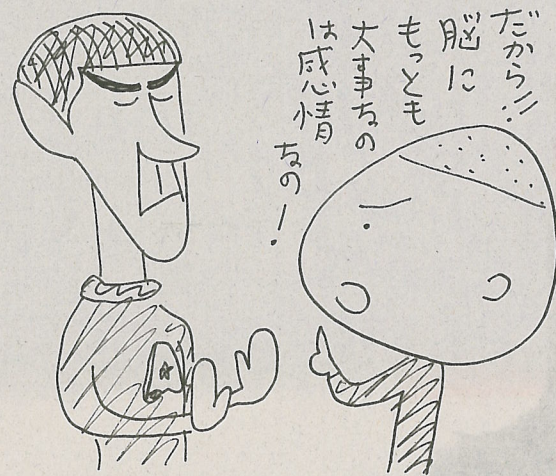
私は「笑い」というのにも同じように興味があるが、おそらく根っこは同じなのだろうと考えている。

「脳の本」といったって、読むのは通俗科学書であって、主に「今こここまでわかってきた」みたいな話題を追っかけていたにすぎない。

「愛は脳を活性化する」(松本元著・岩波科学ライブラリー)は、私がいままで読んできた「脳の本」の中で最も「腑に落ちる」気のした本で、読みながら何度もはげしく相づちを打った。

「愛は脳を活性化する」というタイトルを見て「何となくわかるような気がする」と思う人があるかもしれない。それはまァ、間違いではないが、それで本を読んだ気になるのは大きな間違いだと断言できる。

この本には、平凡な言い回しで驚くべきことが



○二つの脳はその成り立ち上、わかり合えないのが普通だが、それなのにわかってもらいたがる。

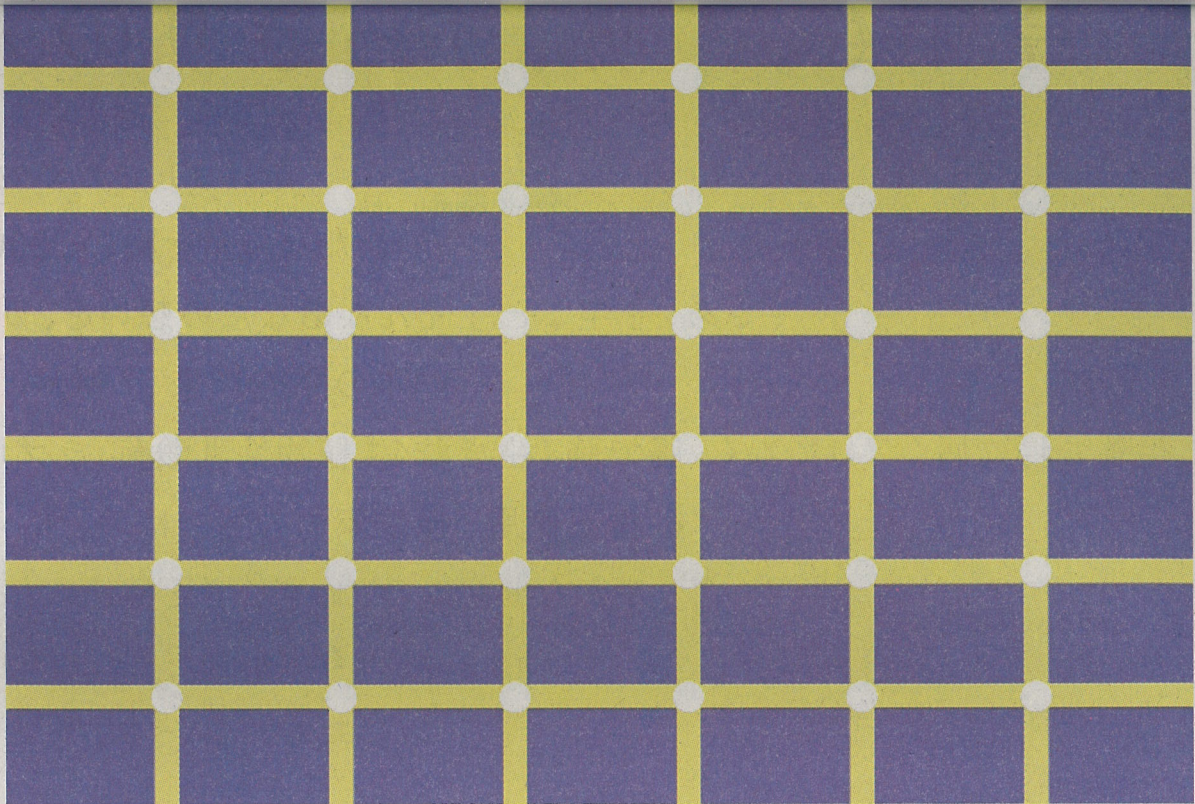
○脳は好き嫌いで判断し、気持ちよくなりたくて考える。

○脳をコンピューターのように「出力」で評価するのは脳の実力を理解しないやり方だ。

私が言ったのなら単なる言いつばなしだが、研

# 1 「スウェーデンの光」

あれ、白い丸がチカチカ



# 2 「赤の渦巻き」

オレンジ部分と赤紫の部分が  
あるように見えるけれど……



「人間はものを目で見るのではなく、脳で見るのだ」という考え方が、今世紀に入り、広く受け入れられ始めた。目の錯覚（錯視）も、目ではなく脳で起こる現象であると考えられるようになってきた。錯視は異常ではないので、錯視を研究すれば脳のことがよくわかるかもしれない。

図1 「スウェーデンの光」は、白丸の中に青い光がせわしなく発光して

北岡 明佳

立命館大教授(知覚心理学)

# どこで起こる？錯視の不思議

は消えるように見える。この現象はきらめき格子錯視と呼ばれ、ドイツの研究者がモノクロ錯視として97年に発表した。

この錯視は、見つめている場所では起きない。目を動かした方がよく起こる。格子を斜めにしたたり、格子が曲がっていたりすると錯視が減少する。いわばこの錯視は「線」に反応して起きる。

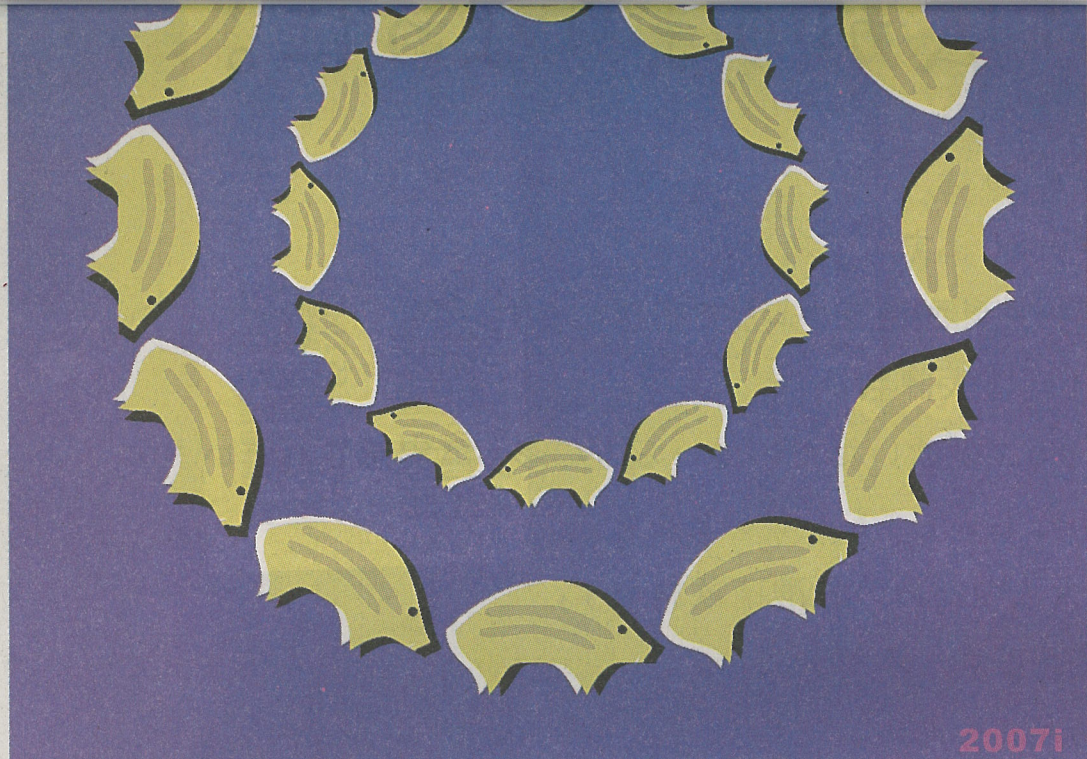
目の網膜にある細胞の相互作用でこの錯視やその仲間を説明する研究者もいるが、「線」に反応する神経細胞は目にはなく、脳にしかないから、脳で起きていると考えられる。

図2は「赤の渦巻き」で、背景の赤は実は白でも同じ色だ。だが、黄色の線には含まれた赤はオレンジ色に、青色の線には含まれた赤は赤紫色に見える。青や黄の光が網膜上で赤に混合した結果起きる、と考える研究者もいるが、この錯視も「線」に反応する錯視であり、脳で起きていると私は考えている。

最後に、今年の干支にちなんで作った図3「2007年亥」を紹介しよう。イノシシの輪が互いに反対方向に回転して見えないだろうか。

◇ ◇

きたおか・あきよし 61年生まれ。著書に「トリック・アイズ」(カンゼン)シリーズなど。



# 3 「2007年亥」 イノシシが行進するよ



- 二つの脳はその成り立ち上、わかり合えないのが普通だが、それなのにわかってもらいたがる。
- 脳は好き嫌いで判断し、気持ちよくなりたくて考える。
- 脳をコンピューターのように「出力」で評価するのは脳の実力を理解しないやり方だ。

私が言ったのなら単なる言いつばなしだが、研究の結果としてこうしたことがわかったのがおもしろいのだ。

「好きこそものの上手なれ」と言ってしまうがカルタに書かれた文句にすぎないが、これが脳の構造的特性だと知れば、俄然、興味が深くなる。なるほど、我々が「わかった!」と喋ってうれしかったのは、うすうすわかっていたのに言葉にできないでいたことだ。

飛行機が構想され実現される過程で、鳥の飛行が解明された。同じように脳型コンピューターの開発が脳理解を深めるだろうという先生の言葉に、私は賛成だ。

# 好き嫌いの情で動く脳

イラストレーター 南 伸坊

私は本を読まない方の人間だが、若いころから「脳の本」は好きで、割合に読んだ。脳のことを脳で考えるのがおもしろいからだと思う。

私は「笑い」というのにも同じように興味があるが、おそらく根っこは同じなのだろうと考えている。

「脳の本」といったって、読むのは通俗科学書であって、主に「今ここまでわかってきた」みたいな話題を追っかけていたにすぎない。

「愛は脳を活性化する」(松本元著・岩波科学ライブラリー)は、私が今まで読んできた「脳の本」の中で最も「腑に落ちる」気のした本で、読みながら何度もはげしく相づちを打った。

「愛は脳を活性化する」というタイトルを見て「何となくわかるような気がする」と思う人があるかもしれない。それはまァ、間違いではないが、それで本を読んだ気になるのは大きな間違いだと断言できる。

この本には、平凡な言い回しで驚くべきことがたくさん書いてある、と私は思った。先生は脳型のコンピューターをつくらうとしていた方で、だからコンピューターと脳の違いを鮮やかな形で示されたのだった。

正確には本に当たってもらおうとして、私が乱暴に要約すると以下のごとくになる。

- 知・情・意のうち、最も脳にとって重要なのは「情」である。
- 快感が脳を活性化し、活性化した脳は快感を得る。
- 脳はあらかじめわかっていることをわかる。

(図はいずれも北岡明佳教授作)

2007!